

Crescent flower (絶対領域へのフェティシズム)

写真学科
酒井孝彦

Crescent flower

Department of Photography
SAKAI Takahiko

この作品は2011年夏から秋にかけて制作されたものです。何故このシリーズを制作するに至ったかと言いますと、どうもこの所「アート」の世界、こと若い人の作品等では力づくでショックを与えるような作品が多く、見た一瞬で吃驚はするもののその奥へ導く深さがなく思えました。

「作品」というものは人間が創り人間に見せるものです。それを見た人々が不愉快になるものを作り展示／公開する事は如何かと思います。只、それが「時代のトレンド」とするならば私の時代へのアンチテーゼとして、この作品を上記のような制作をする人やそれを推奨する方々へ投げかけたく思うのです。

コアテーマとしては「美しさ」です。古来、女性というのは多くの美術／芸術においてその造形を美しいものとしてモチーフに使われてきましたが、こと最近では明らかにセックス目的なものも多くそれをさえアートと呼ばれるように感じます。勿論女性と云うのは私からは異性である以上、永遠なる憧憬があります。ただ短絡的にセックスにつなげるより「現代的な見方」を用いてその美しさを表現できないだろうかという実験的な作品でもあります。

最近では膝上丈靴下「ニーハイ」を履く女性が多く、スカート、パンツからニーハイまでの間に見えている地肌部分を若い人達は「絶対領域」と呼び、そこに「萌え」というエモーションを持ってして憧れています。そこにこそ古来からの女性への憧憬というものを感ずります。

そしてこれらの作品は21作品創りましたが、この展示は「カフェ」で行うというルールを決めていました。ほんの幾らかでもセクシャルな部分がある作品を飲食する場所で鑑賞するという試みです。人間の3大欲の中の食欲と性欲はなかなか同居は出来ません。ですが私の考えた所は「じっと眺めていられるエロス」であり、しかも飲食をする空間にて凝視出来るエロスでした。女性の美しさを眺めていられる本作品では美術／芸術の本来というか古来からの見せ方にこだわり、しかも鑑賞者に女性本来の「美しさ」とは何か？という問いを投げかけています。

こういった内容のテーマをもとに造形的にもスカート部と脚部の流れが花の如く、その上、脚部の流れが三日月の様にも見えるのでタイトルを「Crescent Flower」と名付けました。女性への憧憬という本来の美しさ考えた作品です。







